

水稲 いもち病について



図1 葉いもち（停滞型病斑）



図2 穂いもち（穂首いもち）

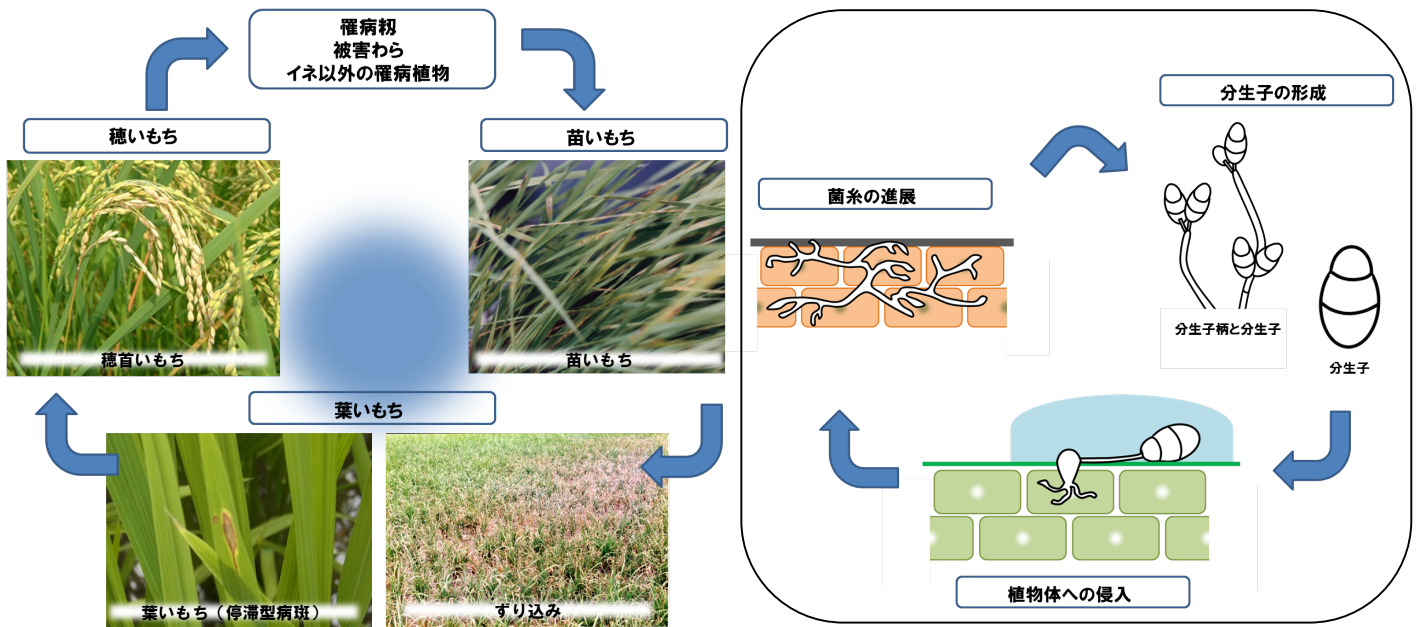


図3 イネいもち病の伝染環と発生サイクル

1 生態

いもち病は糸状菌 (*Pyricularia oryzae* Cavara) の感染によって生じる病害で、感染する時期や部位により、苗いもち、葉いもち、穂いもちなどと呼ばれる。穂いもちでは、穂首に感染したものを穂首いもち、枝梗に感染したものを枝梗いもち、もみに感染したものをもみいもちと呼ぶ。

いもち病菌は乾燥・低温の条件下で長期間生存するため、罹病もみや被害わらが主な一次伝染源となる。いもち病菌は温湿度の条件が整うと分生子（分生胞子）を形成し、分生子は、風などで空気中に舞い上がり、稲に付着する。付着した分生子は適した温度（15～25℃）と水滴があると発芽し、稲の組織内に侵入する。感染後は病斑部でも分生胞子が形成されるため、伝染源となる（図3）。

葉にできる病斑の形態は、気象条件やイネの抵抗力により異なるが、一般的なのは長紡錘形ないし菱形で中央部が灰白色、周縁部が褐色の停滞型病斑である。いもち病菌の感染・進展に好適な条件下では、楕円形で暗緑色～灰色、周辺部が不明瞭な急性型病斑となる。ひどい場合には株全体が萎縮し、てぶりこみ症状を呈し、枯死する。

穂首いもちや枝梗いもちでは、感染部から先が枯死して白穂となることから収量が低下する。

2 発生状況

いもち病の発生は、温湿度など気象条件に大きく影響を受ける。病害虫防除所では、アメダスデータ（気温、降水量、日照時間、風速）を用いた「いもち病発生予察システム（BLASTAM）」を使用し、日ごとの感染好適条件の判定結果を情報提供している。

※岐阜県病害虫防除所HP「ブラスタム（いもち病情報）」

(<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/2993.html>)

県内でのBLASTAMによる感染好適条件初出現は6月中旬頃から見られる。平年の葉いもち発生最盛期は、梅雨後半の7月中旬である。発生状況はほ場によって異なり、日当たりの悪い山際や、窒素過多で葉色が濃く推移しているほ場では、葉いもちの発生が多くなる。

穂いもちの発生は葉いもちの発生状況に影響を受けるため、上位葉で葉いもち病斑が確認されたほ場では、その後の穂いもちの発生が多くなる。

県内で多く作付されているハツシモ岐阜SLとコシヒカリは、いずれも葉いもち・穂いもちに弱い（※令和3年度岐阜県主要農作物奨励品種特性表より）。

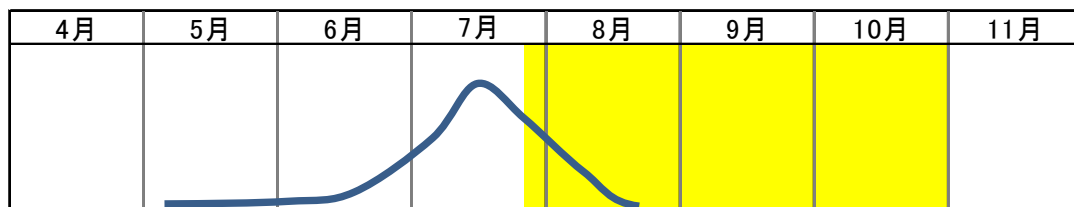


図3 葉いもちの発生消長と穂いもちの発生時期

※ — : 葉いもち発生消長、■ : 穂いもち発生時期

※穂いもちは出穂期に感染し、その後拡大する。

3 防除対策

(1) 健全種子の利用・種子消毒

いもち病発生ほ場から採種した種子は、いもち病菌を保菌している可能性があるため使用しない。播種同時施薬により防除を行う場合でも、抵抗性誘導剤では効果が出るまでに時間がかかることから、種子消毒を徹底する。

(2) 健全苗の利用・ほ場衛生

いもち病が発生した苗を本田に持ち込むと、それらが葉いもちの伝染源となるため使用しない。補植用の置き苗はいもち病が発生しやすく、伝染源となる可能性が高いため、早期に持ち出し処分する。

(3) 薬剤による防除

箱施薬を実施した場合でも、天候やほ場条件によっては葉いもちが発生する。葉いもちが発生後でも薬剤の防除効果が期待できるため、ほ場環境に注意し、発生初期に確実に防除を行う。BLAST

AMによる感染好適条件が多発した場合は、5～10日後（潜伏期間後）には場での葉いもちの発生状況を確認する。

穂いちは、発生後に効果的な防除を行うことが困難である。特に葉いもちが上位葉に発生しているような場合は、穂いもちの発生が多くなるため、穂ばらみ期～穂揃期に予防的な防除を徹底する。

（4）適正な肥培管理・土壌改良

茎葉が窒素過多となるといもち病が発生しやすくなるため、適正な肥培管理を行う。必要に応じて堆肥やケイ酸を使用し、土壌改良を行うことでいもち病が発生しにくい環境を作る。